

異文化接触場面の コミュニケーション研究と日本語教育

—— コミュニケーション・ストラテジー研究の概観 ——

名古屋大学教授 尾崎 明人

このコーナーでは、これから研究を目指す海外の日本語の先生方のために、日本語学・日本語教育の研究について情報をおとどけしています。今回のテーマはコミュニケーション・ストラテジーの研究と日本語教育研究です。

1. はじめに

言語と文化を異にする個人と個人がコミュニケーションを行う場面を異文化接触場面とよびます。近年、日本語を媒介言語とする異文化接触場面は国内外で急速に増えており、これからもますます増えていくと思われます。

日本人との異文化接触場面で円滑なコミュニケーションができる能力を育てることが日本語教育の目的の一つです。したがって、日本語による異文化コミュニケーションの過程で、どのような問題が、いかなる原因で起き、その問題がどのように処理されているかを明らかにする研究は日本語教育の内容と方法を考える上でとても重要です。このような観点から、この小論では、異文化接触場面のコミュニケーション・ストラテジー研究について紹介します。

2. 異文化接触場面のコミュニケーション・ストラテジー (CS)

日本語学習者と日本語母語話者が話をするとき、さまざまなコミュニケーション上の問題が起こります。次のやり取りは日本人主婦 (J) とオーストラリア人日本語学習者 (A) の会話の一部ですが、ここでもコミュニケーション問題が起きています。

1. A : あー いえ いえのー 病気 になりますか。
2. J : いえのー . . .
3. A : 病気。
4. J : . . . いえの病気って、わかりません。

5. A : (小声で) Homesickness?

6. J : ああ、ホームシック (笑いながら)。ホームシックになりますか。

7. A : はい はい (笑いながら)。

8. J : いいえ。なりません。主人と子どもがいますから。

9. A : はい。

(「ー」は音の引き延ばし、「. . .」は目立ったポーズを示す。)

Aはhomesicknessを日本語でどう言えばいいかが分かりません。そこでhomeを「家」に、sicknessを「病気」にそれぞれ直訳して、何とか相手の日本人に伝えようとしています。相手の日本人には上手く伝わりません。Aは仕方なくhomesicknessと英語を使っています。Aは発話生成の面で問題を抱えており、日本語への逐語訳と英語の使用という手段によって問題を解決しようとしていることが分かります。一方、Jは「いえのー. . .」と言い淀んでいます。相手の質問が理解できないという問題が起きていることを間接的に示そうとしています。Aからは何の手助けも出てこなかったため、結局Jは「分からない」と言って、理解面の問題を表に出しています。

上の例では単語が分からないという日本語知識の欠如が問題の原因でした。しかし、コミュニケーション問題はこのような言語知識の問題に限られるわけではありません。相手との心的、社会的距離をどのように調整するか、自分をどのような人間として相手にみせるか、相手が聞きたくないと分かっていることをどのように切り出すか、などなど様々な問題があります。

このようなコミュニケーション問題に対処しながら、

一方ではより効果的なコミュニケーションを行うために、私たちはさまざまな方策を用いています。このような問題処理の方策、効果的なコミュニケーションのための方策を外国語教育、第二言語習得の研究分野ではコミュニケーション・ストラテジー（CS）とよんでいます。

3. コミュニケーション・ストラテジー（CS）の研究

CSの研究は1970年代に始まり、1980年代に盛んになりました。CS研究の初期の段階では、言語知識の不足を補うために第二言語学習者が用いるストラテジーに関心が寄せられ、CSをどのように定義するか、どのように分類するかがまず議論の中心になりました。

CSの定義には、大きく見ると、心理言語学的な定義と社会言語学的な定義の二つがあります。心理言語学的な定義とは次のようなものです。何かを表現しようとして必要な単語や文法が分からない、思い出せないという「問題」に直面したとき、私たちは頭の中でいろいろなことをやります。その頭の中でやっていること（起きていること）がCSだという考え方です。問題処理の認知的なプロセスをCSと考えるわけです。一方、社会言語学的な立場では、会話参加者が、言語知識や背景知識のギャップを埋めながら、コミュニケーションを成立させるために用いる方略をCSと捉えます。CSは参加者のやり取り、すなわち談話の中に現れるものということになります。

この立場の違いは、CSの研究方法の違いにもなっています。心理言語学的な立場に立つ研究では、実験的な手法をよく用います。被験者が一語では表現できないような物や図形を見せて、人為的にコミュニケーション問題を作り出し、それをどのように説明するか調べるという研究方法です。また、使用言語の違いがCSの種類や使用頻度に影響を及ぼすかどうかを明らかにするために、被験者に母語と第二言語で同じ課題をやらせるという実験方法も用いられます。一方、社会言語学的な立場に立つ研究では、実際の会話にどのようなコミュニケーション問題が現れ、それが会話の展開の中でどのように処理されるかに着目します。また、非母語話者の用いるCSと母語話者のCSを比較し、母語話者から見て不自然あるいは不適切と判断されるCSを調べる研究もあります。

学習者が用いるCSの研究には多くの興味ある研究課題が考えられます。①コミュニケーション上効果的なCS

は何か、②学習レベルによって使用するCSは変わるか、③言語使用の目的や場面によって使用するCSは変わるか、④学習環境によって習得されるCSは違うか、⑤学習者の性格はCSと関係があるか、⑥学習者の母語はCSと関係があるか、⑦CSは第二言語習得を促すものか、⑧CSを外国語の授業で教える必要があるか、などです。

4. まとめ

これまでのCS研究は心理言語学的な観点からのものが多かったと思われます。コミュニケーション能力を高めるための日本語教育にとっては、異文化接触場面のコミュニケーション過程、すなわち接触談話を社会言語学的な視点から深く掘り下げる研究がもっと必要です。このような研究は、日本語教育に直接役立つだけでなく、接触場面の一方向の当事者である日本語母語話者にとっても有益な情報を提供するものになるはずで、異文化接触場面でよりよいコミュニケーションを成立させるためには、母語話者もまた効果的なCSを学ばなければならないからです。

日本語教師にとって大がかりな研究を続けることは決して容易ではありませんが、学習者を異文化接触場面に参加させ、それを録音、録画し、学習者と一緒に異文化コミュニケーションの過程を観察することによって教師もまた多くのことが学べると思います。

参考文献

初期の研究成果をまとめた論集としてFaerch and Kasper (1983)は必読の文献です。また、Kasper and Kellerman (1998)では、社会言語学的な視点からの論文が一つのセクションにまとめられており、CS研究の現状を知るのに役立ちます。

- Neustupny, J.V. 1995. 『新しい日本語教育のために』大修館書店
- Faerch, C. and C. Kasper (eds)(1983) Strategies in Interlanguage Communication. Longman.
- Kasper, G. and E. Kellerman (eds)(1998) Communication Strategies. Longman.
- Ozaki, A. (1989) Requests for Clarification in Conversation between Japanese and Non-Japanese. Pacific Linguistics Series B-No.102. The Australian National University.